

広島平和記念資料館 令和4年度第2回企画展

広島戦災児育成所

—子どもたちと山下義信^{ぎしん}—



開設当初の広島戦災児育成所

期間 2023年(令和5年)3月24日(金)～9月11日(月)

会場 広島平和記念資料館 東館1階 企画展示室

はじめに

原爆により、多くの子どもたちが家族を失いました。戦後、孤児となった子どもたちを養育する施設が相次いで設立されますが、「広島戦災児育成所」は、いち早く1945年(昭和20年)12月に広島市郊外の佐伯郡五日市町に開設されました。初代所長となった山下義信[1894年(明治27年)～1989年(平成元年)]は、私財を投じて施設をつくり、その運営と子どもたちの養育にたずさわりました。

その後、山下義信は広島県選出の国会議員として主に社会福祉に関する法整備にも精力的に取り組みました。とりわけ戦争の犠牲となった動員学徒への補償や原爆医療法の立案に貢献しました。

今回の企画展では2018年(平成30年)に山下家よりご寄贈頂いた資料を中心に、広島戦災児育成所のあゆみと創設者である山下義信の生涯を紹介します。

1. 学童疎開と原爆投下

アメリカ軍による日本本土への空襲が本格化すると、広島市内の子どもたちも学童集団疎開の対象となり、1945年(昭和20年)4月から県内の農村部への疎開が始まりました。たくさんの子どもたちが疎開先で集団生活を送っていた1945年(昭和20年)8月6日、広島に原爆が投下されました。



疎開先へ向かう子どもたち

1945年(昭和20年)4月 広島市立白島小学校提供

子どもたちは、別れを惜しむ家族に見送られ、列車などで疎開先へ向かいました。リュックサックやかばんを持ち、その日の昼食が必要な場合には、最後になるかもしれないと家族が心を込めてつくった弁当が入っていました。写真は疎開先へ向かう白島国民学校の子どもたちの様子を撮影したものです。

疎開先の寺院に集合した子どもたち

1945年(昭和20年)4月

安佐郡鈴張村 長覚寺 広島市立白島小学校提供

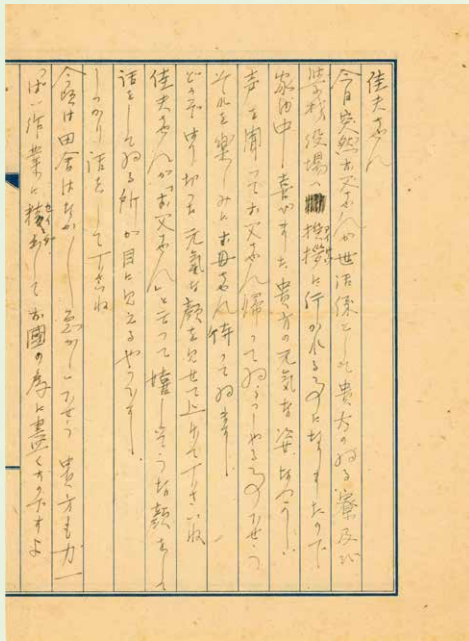
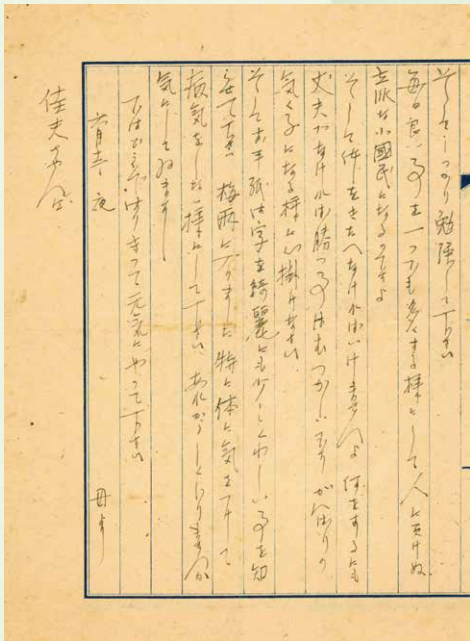
疎開先に到着した引率の教員や子どもたちは、地元の人たちの歓迎を受けました。食糧難でめったに食べる事のできない「おはぎ」が振る舞われ、喜ぶ子どもたちの姿もありました。地域の寺院や集会所などを宿舎とし、地元の国民学校に通いました。



竹やぶの開墾

1945年(昭和20年)4月～9月 双三郡三良坂町 梅野陽造提供

少ない食糧を補うため、子どもたち自身も鋤を持ち、土地を耕して畑をつくりました。写真は中島国民学校の児童たちが作業をしている様子です。戦争を遂行するため、農村部では食糧増産が奨励され、疎開した子どもたちも田植えや麦刈り、田んぼの草取りなどの作業を手伝いました。



母親から疎開児童への手紙

1945年(昭和20年)6月12日
大西佳夫寄贈

佳夫ちゃん
今日突然お父ちゃんが世話係として貴方のいる寮及び学校、役場へ挨拶に行かれる事になりましたので家内中喜びました 貴方の元気な姿、なつかしい声を聞いてお父ちゃん帰っていらっしゃる事でしょう それを楽しみにお母ちゃん待っています…(一部抜粋)

八月六日 月曜日 晴	三條国民学校 三條町 三條郡 広島県	南段八幡宮 疎開児童 三條町 三條郡 広島県	三條国民学校 三條町 三條郡 広島県
八月七日 火曜日 晴	三條国民学校 三條町 三條郡 広島県	三條国民学校 三條町 三條郡 広島県	三條国民学校 三條町 三條郡 広島県



原爆投下後の日誌

1945年(昭和20年)8月6日、7日
大田巖壮寄贈
三條国民学校の引率の教員が記した日誌です。8月7日には、広島が空襲を受けたことが心配でふさぎ込み、皆なかなか眠れなかったことが記されています。
*一部画像を加工しています。

真っ赤な広島空を見て泣く子どもたち

1945年(昭和20年)8月6日 安佐郡大林村 大林説教所
米尾淑子作(被爆時の年齢10歳/絵を描いた年齢39歳)
作者の米尾淑子さんは、被爆当時、白島国民学校の児童で安佐郡大林村に集団疎開していました。

一面の廃墟

1945年(昭和20年)8月11日~17日
爆心地から400m 鷹匠町
大橋完造撮影・提供
鷹匠町から西に向かって撮影したものです。この一帯は、本川国民学校や広瀬国民学校の学区でした。



2. 広島戦災児育成所と創設者山下義信

原爆投下から2日後、広島市内では原爆により家族を失った身よりのない子どもたちのため比治山国民学校に迷子収容所が開設されました。出征先の長崎県五島列島から9月に復員した山下義信は、この収容所を訪れ、原爆による傷害や食糧難により子どもたちが亡くなっていく惨状を目の当たりにします。

1945年(昭和20年)12月、山下義信は私財を投じて広島戦災児育成所を設立し、迷子収容所の子どもたちに加え、原爆により両親を失い学童疎開先に残っていた子どもたちも引取り、育成所の子どものとして養育することになりました。

創設者 山下義信



山下義信 山下家提供

山下義信は、呉市内で呉服屋を営む裕福な家の長男として生まれ、家業を継ぎましたが、1929年(昭和4年)に始まる世界恐慌の影響を受け経営難となり、一時は妻子を養うことも困難となりました。信仰心があついで母親の強い勧めもあって仏教を学び、40歳を過ぎてから僧侶として新たな道を歩むことになりました。

戦時中は陸軍に志願し、広島への原爆投下時には出征先の長崎県五島列島の福江島でその報を聞き、同地で終戦を迎えました。山下はこれまでの自分が来た道を反省し、戦争の一切の犠牲者の救済に身を捧げることを決意し、9月半ばに広島に帰りました。



「救民運動発願」1945年(昭和20年)8月27日
山下が戦争犠牲者救済の決意を記したもの

広島戦災児育成所

山下は比治山の迷子収容所の存在を知り、佐伯郡五日市町にあった県の建物を孤児救済に使うよう知事に直接交渉をしました。その結果、県から資金提供はできないが土地と建物は貸し出すとの回答を得たので、山下自身が孤児の救済にあたることになりました。

原爆により孤児となった子どもたちを両親に代わり家庭の子どもとして育てたい、という思いから、山下は「広島戦災児育成所」と名づけ、私財を投じ、家族の理解と協力者を得て施設を整備しました。

1945年(昭和20年)12月23日から、比治山迷子収容所から約30人、学童疎開先から約20人のほか、行き場をなくした子どもたちを迎え入れ、翌1946年(昭和21年)3月には3歳から16歳の子ども約60名を受け入れました。



開設当初の食事風景

はじめは広い部屋がないために、子どもたちを二班に分けて食事をさせていましたが、1946年(昭和21年)5月からは月に数回は「家庭会食」の日を設け、各寮で円卓を囲んで食事をする機会を作りました。同年秋には食堂が完成し、テーブルクロスを敷いたり、食器を茶碗にしたりするなど、できるだけ家庭的な雰囲気のできるような工夫がなされました。



育成所の門標



育成所内での教育

育成所の開設当初は所内で学校の教育を受けられるように職町国民学校の分教場が設けられ、主に学校から派遣された教員がその教育にあたりました。この所内教育は1948年(昭和23年)3月まで続けられ、その後は近隣の学校に通学しました。

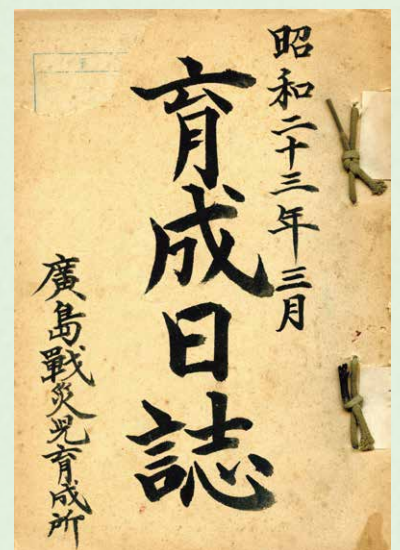
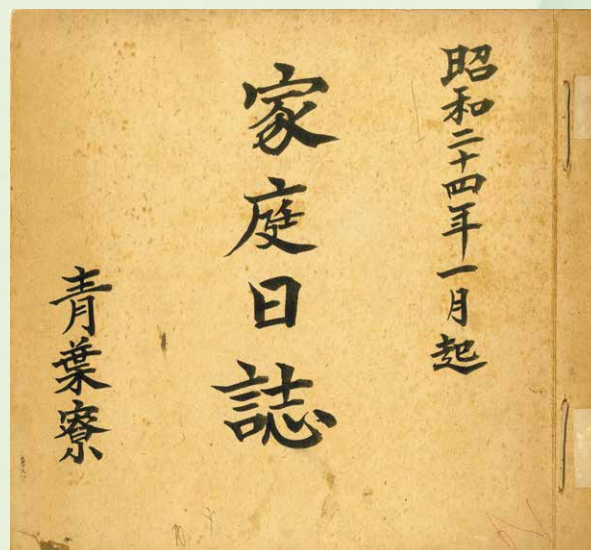
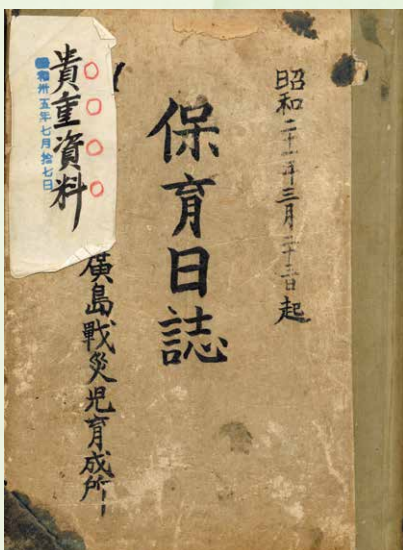


育成所内に設けられた童心寺

親を想う子どもたちのため、山下は育成所の敷地内にあった建物を仏式に改装し、「光ヶ丘童心寺」を作りました。毎朝の本堂でのお参りのほかに、各寮に仏壇を設け、毎月6日は原爆で亡くなった家族の命日として法要を営みました。

昭和天皇行幸

1947年(昭和22年)12月7日、昭和天皇の広島訪問時に宮島から広島市内に向かう途中で、育成所の近くの奉迎所で車を降りた天皇を出迎える機会がありました。山下は少年僧を紹介し、原爆で負傷した子どもの頭の傷を見せながら、育成所の説明をしました。



育成所の日誌

育成所には炊事、衛生、被服、教育、庶務など部門別の業務日誌と、子どもたちの保育日誌があり、この保育日誌は1948年(昭和23年)から「家庭日誌」と題されるようになりました。

育成所に届いたララ物資

育成所は行政の支援だけでなく、国内外の多くの人々から寄付金や物資を受け、青年団や婦人会をはじめとした様々な団体や個人から勤労奉仕の支援を受けました。とりわけ1946年(昭和21年)にアメリカの各種宗教団体を中心に結成されたアジア救援公認団体(Licensed Agencies for Relief in Asia)からの支援物資、いわゆるララ(LARA)物資は1952年(昭和27年)まで続けられ、育成所の子どもたちの生活を支えました。



精神親の住居の位置が書かれた地図を見る子どもたち

1949年(昭和24年)8月に広島を訪問したアメリカの評論家ノーマン・カズンズたちの提唱で広島原爆孤児の支援運動がはじまり、アメリカの家庭が「精神親」となり広島の孤児を精神的・金銭的な面で支える「精神養子」の運動がこの育成所の子どもたちから始められました。後にこの運動は他の広島の児童養育施設にも広がり、子どもたちが大きくなるまで続けられました。



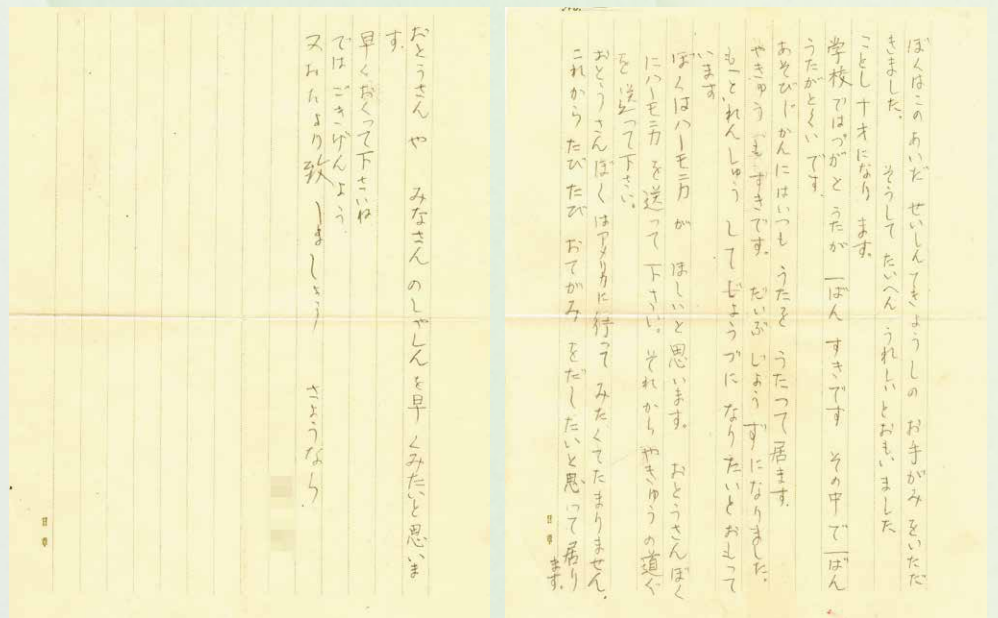
アメリカの精神親から贈られた本
上田正明寄贈



アメリカからの援助物資
似島学園寄贈



育成所の子どもが精神親に宛てた手紙
James Key and Brinkley Burks Pound 寄贈
*一部画像を加工しています。



3. 政治家山下義信の活動

山下義信は所長として育成所の運営にあたりながら、終戦直後に抱いた全ての戦争犠牲者を救済する、という思いを実現するため、1947年(昭和22年)4月に戦後初の参議院選挙に立候補し、当選しました。

以後、国会議員として2期12年間、国会の常任委員会の一つである厚生委員会の一員として、後に委員長として、戦後日本の社会福祉全般に関わるさまざまな法制度の創設に取り組みました。

中でも、後の原爆医療法の原案を作り、広島選出の国会議員として国政と地方の橋渡し役として重要な役割を果たしました。



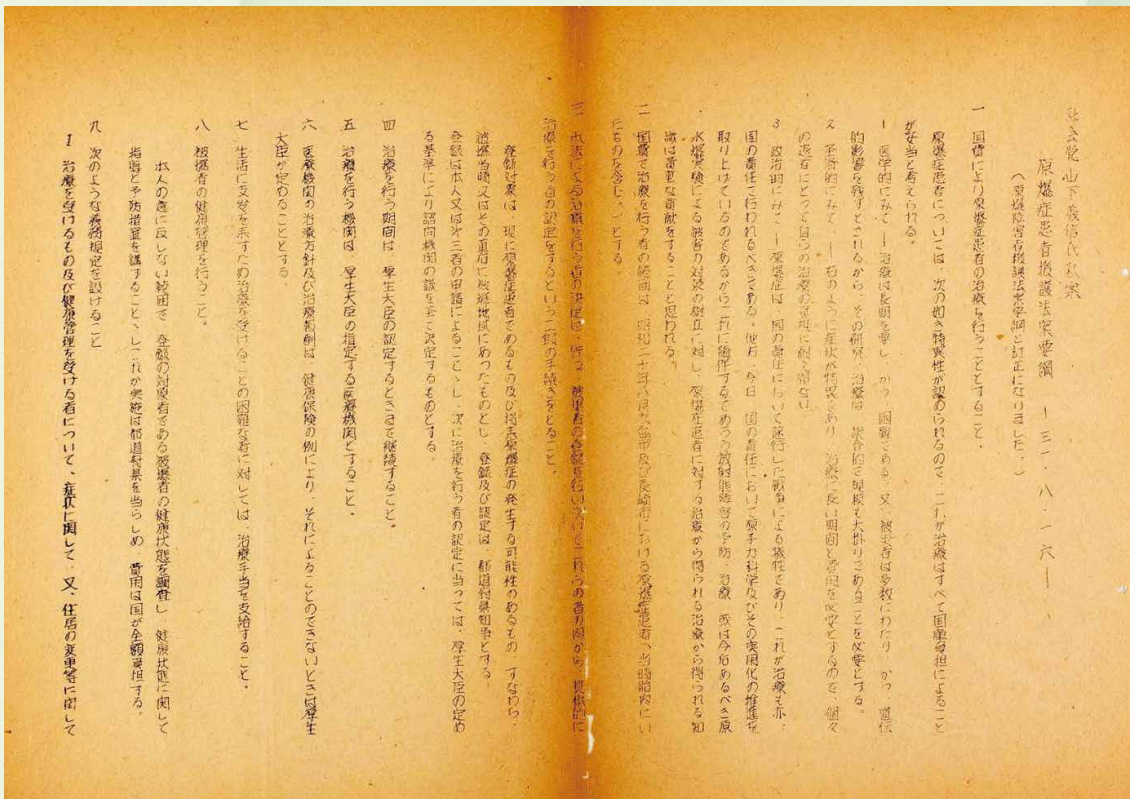
官僚とともに具での未亡人団体の会合で要望を聞く山下

1950年(昭和25年)夏 山下家提供



厚生省で陳情をする山下

1959年(昭和34年)1月 中国新聞社提供



「社会党山下義信氏私案 原爆症患者援護法案要綱」

1956年(昭和31年)8月16日 広島大学文書館所蔵(広島県原爆被害者団体協議会関係文書03-034)

1957年(昭和32年)に原爆医療法が制定されるのに先立ち、山下は1956年(昭和31年)年8月に社会党の私案として法案要綱を発表し、原爆症は国が起こした戦争による犠牲であり、特異な症状が長期にわたり続くことから、国の責任で治療を行うことを求めました。

「国費により原爆症患者の治療を行うこととする。

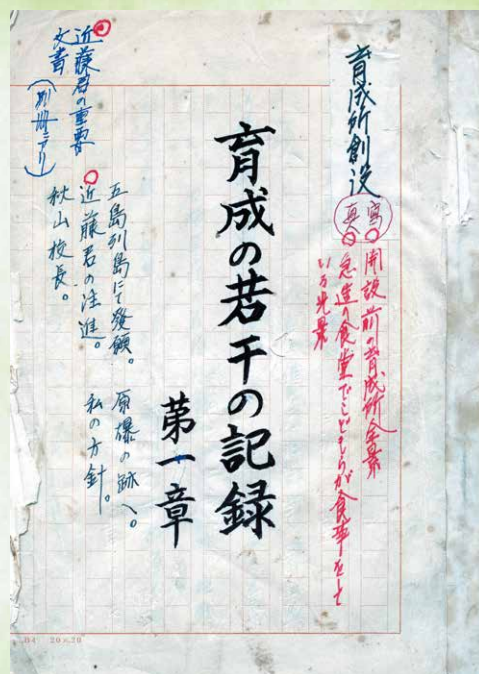
原爆症患者については、次の如き特異性が認められるので、これが治療はすべて国費負担によることが妥当と考えられる。」

「政治的にみて一原爆症は、国の責任において遂行した戦争による犠牲であり、これが治療も亦、国の責任で行われるべきである。」(一部抜粋)

おわりに

山下義信が開設した広島戦災児育成所は1953年(昭和28年)に広島市へ移管されるまでに約170人の子どもたちを受け入れました。育成所で暮らした子どもたちの多くは、育成所にいたことを家族にも話さないまま生きてきましたが、当時をしのび、ともに過ごした仲間同士で集まることもありました。

施設の運営を離れた山下義信は、1959年(昭和34年)には政治の場からも退きましたが、育成所の子どもたちのことを終生案じ、励まし、支え続けました。晩年の山下はかつての育成所の記録資料を大切に保管し、育成所創設の経緯から書き起こした「育成の若干の記録」をまとめました。これらの記録は、原爆で親を失った子どもたちと彼らを育てる大人たちが戦後の混乱期をどのように生き抜いたかを生き生きと伝える貴重な資料となりました。



「育成の若干の記録」第1章

参考文献

- ・ 山下晃「語れぬままに」 * 山下義信氏の長男による被爆体験記
https://www.global-peace.go.jp/taikenki/taikenki_syousai.php?gbID=629&dt=230213172017
- ・ 山下岑子「私の被爆体験」 * 山下義信氏の長女による被爆体験記
https://www.global-peace.go.jp/taikenki/taikenki_syousai.php?gbID=646&dt=230215152839
- ・ いずれも『しまつてはいけない記憶 被爆体験集 I 被爆70周年記念事業』
(国立広島原爆死没者追悼平和祈念館、2015年)所収
- ・ 西本雅実「『原爆孤児』一語られざる軌跡」(『広島復興経験を生かすために一廃墟からの再生 第3巻』国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会編・刊、2017年)
<https://hiroshimaforpeace.com/fukkoheiwakenkyu/vol3/3-9/>
- ・ 新田光子『広島戦災児育成所と山下義信—山下家文書を読む』(法蔵館、2017年)



広島平和記念資料館 令和4年度第2回企画展

広島戦災児育成所—子どもたちと山下義信—

期間 2023年(令和5年)3月24日(金)～9月11日(月)

会場 広島平和記念資料館東館1階企画展示室

発行 広島平和記念資料館学芸課

730-0811 広島市中区中島町1-2

TEL 082-241-4004 FAX 082-542-7941 <https://hpmmuseum.jp/>

